

# 日本にとっての「共和国モデル」

中野 裕二(駒澤大学法学部)

## 要旨

### 1. フランスの「共和国モデル」とは

フランスにとっての「共和国モデル」とは、フランス革命の精神の具体化であり、フランス共和国の社会観であり、そして社会編成原理である。フランス革命前の社会秩序の特徴を端的に表現すれば、「集団を基礎とする不平等社会」であった。革命後に目指された社会秩序は、「個人を基礎とする平等社会」である。この社会秩序を実現する政治体制がフランス共和国である。それゆえ、今日でも、宗教・言語・出自などにかかわらず市民の平等は、フランス共和国憲法の柱の1つである。

現実の社会は宗教、言語、出自などの面で多様な成員からなっている。こうした多文化社会において市民の平等を実現するために構想されたのが、「公的領域－私的領域」の明確な分離を原則とする二元的社会観である。この社会観をモデルとして表したのが「共和国モデル」である。この社会観は、一人の人間をポリティックの側面（主権者として公事、政治に参画する個人＝*citoyen politique*）とシビルの側面（政治とは区別された場面で私的な存在として把握される人＝*citoyen civil*）に分けることで成り立っている。「公的領域－私的領域」の分離によって、文化的多様性を前提とした社会で、人はその属性にかかわらず「公的領域」では市民として平等であり、「私的領域」においてそれぞれの属性を享受する（個性的に生きる）という意味で自由である。

シビルの要素を宗教と捉えれば、「公的領域－私的領域」の明確な分離は「ライシテ」や政教分離となるが、「共和国モデル」はそれ以外でも見られる。シビルの要素を地域性や社会階層と捉えることで、「公的領域－私的領域」の明確な分離を実現する政治行政機構が構築されている。「共和国モデル」はフランスの社会編成原理であるといえる。

### 2. 「共和国モデル」の特徴・限界・問題

「共和国モデル」の特徴は、「公的領域－私的領域」の明確な分離による平等と自由の両立の実現にある。これを実現するため、「公的領域」において人が抽象的個人と措定される点も特徴である。人は、自らの持つ多様な属性を捨て去って「公的領域」で活動するのである。さらに、「公的領域」には「市民」しかいないので、内部を区切る境界が存在しないという意味で単一であり、個別性を帯びないという意味で普遍的である。

「共和国モデル」のこの特徴は同時に限界と問題もはらんでいる。人は「私的領域」において自由であるが、それは「私的領域」の中の自由であり、「共和国モデル」を否定する自由は保護されない。また、抽象的個人が「市民」として平等だという立場に立つため、フランスにはマイノリティは存在しないという公式見解に立つ。さらに、人を人種、宗教、エス

ニシティの側面で捉えないため、人々が抱える困難や困りごとと人種、宗教、エスニシティとの関係が分析できない。同じ理由で、特定の人種、宗教、エスニシティに関する政策をとっていない。また、「公的領域」は普遍的だといわれるが、実際には個別性（「フランス性」）を帯びている。個別性に無自覚なまま「公的領域」の普遍性を強調することは、「フランス的なもの」を押しつけることになる。

### 3. 「共和国モデル」に依拠したフランスの今日的課題

フランスは「共和国モデル」に基づいて国民統合を実現したと自認する。移民の統合も同じように実現できると期待された。種々の経緯を経て、今日、「共和国モデル」はムスリム系移民に対して持ち出されることが多い。

ムスリム系移民に対して統合の「失敗」が言われ、フランス側は「共和国」の理念を学び取っていない移民の側に責任を押しつける。しかし、移民の側から見れば、移民の（特に若者の）同化傾向は進んでいるにもかかわらず、不平等や差別が存在しているため、「共和国モデル」を信頼できないし、理念の押しつけにも反感を抱く。必要とされるのは、反差別政策であり、社会経済的な政策である。こうした対立軸の中で今日、「共和国モデル」をめぐる種々の問題が生じている。

それは、「共和国」の「市民としての振る舞い」の一方的おしつけである。また、移民は「市民らしくない」という先入観をもった行政、警察の対応も問題となっている。「公的領域」の拡大解釈も起こっている。公共空間と「公的領域」が同一視され、「共和国モデル」を根拠に自由の行使を制限する傾向にある。その他、「公的領域」のフランス性の公言も起きている。「共和国モデル」は「公的領域－私的領域」の分離に基づき自由と平等の両立を目指し、多文化社会における共生の場であったはずが、今日、差別・排除を正当化する道具として「共和国モデル」が使われ、都合のよいように「共和国モデル」が解釈されている。

### 4. どのような社会をつくるのか？：日本への示唆

多文化社会における社会の編成には、いくつかのモデルがある。それは、同化主義、多文化主義、そして「共和国モデル」である。それぞれのモデルにはそれぞれの立場から賛成・反対の意見の対立が生じるだろう。フランスは「共和国モデル」を選択したが、その限界・問題はすでに見たとおりである。どのモデルを選択するにせよ、マイノリティの視点からの不断のチェックが必要だろう。日本に目を向けたとき、日本はどのような社会をつくるのだろうか。モデルを選択したか、しようとしているか、その議論が始まっているだろうか。そもそも、「社会をつくる」という視点で議論しているだろうか。